

## サーチライト With Pastor Jon 創世記 2 章 パート 2

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するの必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

---

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル 4 : 7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rumi

エデンとは“大きな喜び”の意味。

この園は神が造り、人を置いた所で、喜びに満ちていました。

神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

(創世記 2:15)

これは、アダムを庭師という仕事に就かせたということではありません。

仕事というよりも楽しみを得るために彼はエデンの園に置かれ、結果、園の管理をすることになります。

しかし、それは彼にとって労働ではなく楽しみで、同時に創造に繋がっていきました。

神である主は、人に命じて仰せられた。

「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べて良い」(創世記 2:16)

「アダム、見渡してごらん。全ての木、全ての物、全ての喜び、数々の素晴らしいものがあなたを待っている。」

「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。

それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」(創世記 2:17)

「全ての木から、好きな物、欲しい物を取って食べなさい。但し、1本の木を除いて。

もし、その木から取って食べるなら、そのことによって、あなたは死ぬ。」

気付きましたか？

神は、「もし、あなたがその木から取って食べるなら、わたしがあなたを殺す。」とは言っていません。

「もし、あなたがその木から取って食べるなら、“それ”があなたを殺す。」

「If you eat of the tree, “it” will kill you.」

「ジョン、何が言いたいの？」

私が言いたいのは、善悪の知識の木に実っている実が、明らかに何かを、毒、恐らく発癌性のものでしょう、それが化学物質か何なのか私には分かりませんが、人間を死に至らせる何かを含んでいたということです。

神は、「もし、それを食べたなら、わたしがあなたを殺す。」とは言っていません。

「もし、あなたがその木から取って食べたなら、あなた自身が自分に毒をもたらし、そのために非常に痛むことになる。それでも食べたいか？」

皆さんがこのことを分かっていることは承知しています。

でも、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、あなた方の協力が必要です。

なぜなら、教会に来ている子供たちが、余りにも理解できていないから。

彼らは、私が教会で育って来て、何年間も思っていたことと同じようなことを考えているのです。

私は、人が、自分が罪を犯したら、神が追いかけて来て捕まえると思っていた。

神がやって来て、私の頭をたたき割るんだと。

そんなのは父なる神 (Father God) ではなく、ゴッドファーザー。

父なる神は、そんなことしません。

神はアバ (お父さん) なのですから。

あなたが、子供たちが何かをやらかした時に、角材で殴打しないのと同じです。

あなたはそんなこと、しないでしょ？

子供が何かをしでかしたとしても、「よーし。」バン!!! とは、やらないですよ。

角材で激しく殴ったり、機関銃を撃ち放ったり、そんなことしませんね。

だったらどうして、神はそうする、と思うのでしょうか？

私たちは子供に言います。「ベニー、もし、おまえたちが高速道路でフットボールをすることを選ぶなら、うまくはいかないよ。その日の内に、確実に死んでしまうから。」

「メアリー、もし、おまえがそのネズミ取りの毒を飲むことを選ぶなら、その日の内に確実に死んでしまうよ。」

私は、「もし、おまえがその毒を飲んだら、私がおまえを殺す」とは言っていません。

私は、「メアリー、もし、おまえがそれをしたら、“それ”がおまえを殺す」と言っているのです。

これと同じで、とてもシンプルなのに、人々は理解できない。

それで、子供は成長してこう思うのです。

「もし、間違いを犯したら、神が捕まえに来る！」

しかし、聖書にはこうあります。

『“罪”が、あなたを捕まえる。』

罪があなたを追いかけて、罪があなたを破滅させる。

「いや…。私はそんなことでは納得しない。この物語には、まだ問題が残っている。どうして神は、毒のある木を園の中央に置いたのか？ なぜ、善悪の知識の木を最初にそこに置いたのか？」と言うのでしょうか？

それは、神の望みは、人と愛の関係にあることだから。

初めはアダムとエバ、現在はあなた、そして私との。

神は私たちと、愛の関係で繋がることを望んでいるのです。

したがって愛は、いいですか？ 愛は・・・理解して下さい、

愛は、選択することを強く求める。

選択なしに、真実の愛は存在しません。

愛には選択の自由があります。

もし、私が地球上で唯一の男性だとしたら、タンブルが私と結婚して妻になった時、私は絶対に疑問に思ったでしょう。

「彼女は本当に僕を愛しているのか？ それとも他に選べないから、仕方なしにか？」

地球上に他にも男性がいて、それで私を選んだのなら、それはとても意味のあること。

なぜなら、彼女は他の人を選ぶこともできたのだから。

彼女はあの男性を選ぶこともできた。だけど、私を選んだ。それが愛。

愛は選択することを要求します。

選択なくして、本当の愛はあり得ない。

神は私たちに、神を愛することを強要することもできました。

しかし、愛の強要はレイプと同じです。

そうではなく、神はあなたと、私と、愛のある関係を望んでいます。

神は何と言っていますか？

「あなたが選びなさい。」

「アダム、あなたがわたしを捨てたいなら、わたしとの関係を断ち切りたいなら、わたしに背を向けたいのなら、機会を与えよう。その木から取って食べなさい。」

「わたしが要らないなら、そうすれば良い。」

選択の余地がないなら、それは、愛ではありません。

また、神は本当に良いお方なので、その木をあり得ないほどの恐怖に満ちたものに造ることもできたし、「それを食べたら、それがあなたを殺す。だから食べるな！」と言うこともできたし、それ以外にも正しく選択できるものを提供することもできたのに、そうはせず、ただ「そこへ行くな。それをするな。」と語りました。

ところで、その木はなぜ“善悪の知識の木”という名が与えられたのでしょうか？

それは、人がその木から食べることを選んだなら、こう宣言することになるからです。

「私は**承知の上**で、悪を選ぶ!! 善ではなく!!」

「私は**承知の上**で、あなたに反逆する方を選ぶ！ あなたに背を向けることを選ぶ！

あなたには従わない!!」

しかしここには、更に深い意味があります。

人が善悪の知識の木の実を食べた時から、人は、肉体的にも霊的にも死に始めたのです。他にも起こりました。

3章で学びますが、サタンが言います。

「その実を食べたら、あなたの目は開かれ、善悪が見分けられて、神のようになる。」

ある意味、サタンは正しかった。

捻じ曲げた、間違った解釈でありながら、サタンは核心を突いています。

人は実を食べて、自分を見て「裸だ！」

その時、ご覧の通り、神が探しに来ますが、人は「私は裸なので隠れていました。」と言います。

主は、「誰がそう言ったのか？ どうして知ったのか？」

善悪の知識の木の実を食べる以前は、人は、善も悪も知らなかったのです。

なので、一つひとつのことを、それぞれの場面に於いて、御父に聞かなければなりません。

「お父さん、これはどのように対処するのですか？」「お父さん、これはどうですか？」

御父とアダムは、夕暮れ時に一緒に散歩して、そして、いつも会話していました。

なぜなら、アダムは知らなかったから。

それで、彼は御父に従順して生きていたのです。

一緒に考えてみましょう。

ここに、善悪を知る危険があります。

### 知識は人を高ぶらせ (I コリント 8:1)

たとえ聖書や神学の知識であっても、みことばの知識であっても、それが危険な欺きとなり得るのです。

「なんですって!?!」そうです。もし人がこのように言い出したなら。

「私は聖書学校に行った。」「私は神学校に行った。」「神学の本を読んでいる。」「何年も聖書を読んでいる。」「ジョン、あなたのバイブルスタディを 20 年も学んでいる。」

「私は善を知っている。悪も知っている。」

気を付けていないと。いいですか？ 聞いて下さい。

注意していないと、あなたは高ぶり、御父と話さなくなり、共に歩かなくなる。

なぜなら、「私は善を知っているし、悪も知っている。」

そうして、ある日突然、あなたは自立してしまう。

まさしく、知識は、あなたを神から自立させます。

なぜなら、あなたは何が善で、何が悪かを知っているから。

それが、完全に、死そのものなのです。

それが、殺す。

善悪の知識の木、禁断の木の実が、殺してしまう。

「だったらジョン、聖書を知るべきではない、ということ？」

いいえ！ 知るべきです!!

けれども、私たちが求めるべき知識は、神学の学びや学問としての知識だけではなく、みことばを読み、みことばの中で神と個人的な交わりを持ち、神に絶えず語り、礼拝し、賛美し、心を通わせ、対話

し、愛し、聴くこと。

なぜなら、知識を単に学問的に、頭だけで知的に、神学的に捉えるなら、あなたは驕り高ぶるから。

「その手には乗らないよ。答えは分かっている。」「神が、私と個人的な関係を持ちたいだって!? 神が私にそれを求めている?」と言いたいのでしょうか?

神は、あなたが完全に神に拠り頼むことを望んでいます。

あなたを愛しているから。

あなたと分かち合おうと、素晴らしいことをあなたにささやいているから。

神は、想像を遥かに超える祝福を私たちに与えたいのです。

だからこそ、神に完全に拠り頼むということは、とても難しい。特に男性方には。

なぜなら、私たちはいつも、我が子が自立するように、と育てるから。

子供が初めて歩いた時、「いいぞ! その調子だ!!」

初めて靴の紐を結べた時、初めて自転車に乗れた時、車の運転を始めた時、やがて遂に親元を離れた時、「いいぞ! やったー!!」と言いますよね。

子供たちが成功して自立することは素晴らしい。私も息子には自立してもらいたい。

しかし、天の父は、あなたや私とは逆のことを、私たちが完全に神に拠り頼むことを望んでいます。

それは難しいことですが、神は、禁断の善悪の知識の木の実を食べる前のアダムがそうであったように、あなたが絶えず神と語り、頼り続けて欲しいと思っているのです。

「お父さん、これはどうすれば?」「お父さん、これはどうですか?」

御父に語りかけ、御父と共に歩む。そして御父から祝福を受け取る。

ですが、気を付けて下さい。

同じ善悪の知識の木が、あなたと私にとって命取りになり得るから。

注意していないと、それは少しずつ、私たちが主との関係から締め出していく。

だから、聖書を読むこと、神学を学ぶこと、それはとても良いことで大切なことですが、しかし、それだけで終わらないように注意して下さい。

実際、聖書は私たちにとって、御父と会話し、親しく交わるために通って行く入り口なのです。

なので、聖書を読んでいる間、学んでいる間、いつも祈ることが大切です。

ただ情報を得るだけではなく、聖書を読みながら主との親密な交わりを体験して下さい。

聖書を読みながら主に語りかけ、心の内を主に注ぎ出すのです。

そうでなければ、あなたは実りのない死んだクリスチャンになってしまいます。

知識ばかりでいのちがない。

その木は禁断の善悪の知識の木。それから取って食べると確実に死ぬ。

神である主はアダムを見て、創造したものを全て満喫する機会を与えました。

ただ 1 本の禁断の善悪の知識の木を除いて。

「アダムよ、あなたがわたしから自立するなら、それがあなたを殺してしまう。」

**その後、神である主は (アダムを見て) 仰せられた。**

**「人が、ひとりであるのは良くない。」 (創世記 2:18)**

1 章で、神は、創造した全てのものを、その日その日に「良い」「とても良い」と言いました。ただ 2 章では、神は人を造った時、彼を見て「良くない」と言ったのです。「良くない」と

「人が、ひとりでいるのは良くない。」(創世記 2:18) だから、

「わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」(創世記 2:18)

それで神は何をしましたか？ 日曜日に学んだ通り、

神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。

人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。(創世記 2:19)

こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた(創世記 2:20)

しかし、ここでアダムは気付きました。

人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。(創世記 2:20)

日曜日に学んだように、ライオン夫妻、カバ夫妻、キリン夫妻、オランウータン夫妻…

アダムは、突然実感したのです。

「自分には、完成するための相手がいない！」

「自分以外のものにはオスとメスがいるのに…」

ここで神は、自分の必要をアダム自身が知る前に、「わたしはそれを既に知っているのだ」ということを彼に気付かせたのです。

私がこれを理解したことは、私にとって祝福でした。

人が、「私には何かが必要な気がする」と言った時、必要なものがある、とその人に気付かせたのは誰だと思いませんか？ 神です。

何のために？ 欲求不満のため？ 違います。完成するためです。

こうして、アダムは動物に名前を付けるうちに、自分には助け手がいない、ということに気付きました。

そして日曜日にお話した通り、神はアダムを呼んで、21 節に書いてあるように、彼を眠らせました。

草をかき分け、木に登って誰かを見つけに行くのではなく、ただ…「アダム、わたしに任せて、委ねて眠りなさい。」

そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。

それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。(創世記 2:21)

誰かを見つけに行くのではなく、彼のあばら骨で。

こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。(創世記 2:22)

そこでアダムは目を覚まし、

すると人は言った。

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。(いいですねー) これは男から取られたのだから。」(創世記 2:23)

ヘブル語で男という単語は“イシュ”、女は“イシャ” 単純に“a”を加えただけです。

言い換えれば、彼は彼女に自分の名を与え、彼女(イシャ)は彼(イシュ)の名前をもらった。一文字

加えて。

彼は、彼女に自分の名前を与えました。

これが最初の結婚です。

それは、－（ハイフン）で繋いだものではありません。

（\*アメリカでは夫婦の姓は選択制なので、妻の姓－夫の姓を夫婦の姓とすることが認められている。）

アダムは、「私はイシュ、彼女はイシャ。」と言いました。興味深い。

結婚の意味について詳しく知りたい人、「私は結婚するのだろうか」とか「どうしてその人が正しい相手かどうか分かるんだろう」と思っている人は、日曜日のメッセージテープを聞いて下さい。とても大切な学びですから。

今日は、その時に触れなかった幾つかの点についてお話します。

2章のこの部分を理解する上で非常に重要な内容です。よく聞いて下さい。

まず、ここに注目です。

エデンの園で、神はアダムの脇腹から、1本のあばら骨を取りました。

アダムが死んだように深く眠っている間に、彼の脇腹が開かれ、そこから花嫁が出て来ましたね。

ところで、園には、ゴルゴダ、カルバリーという、まさに“園の墓”と呼ばれる別のエリアがあります。

もう一人のアダム。

聖書は彼を“最後のアダム”と呼んでいます。彼の脇腹からも花嫁が出て来ました。

キリスト・イエスが深い眠りについた時、つまり、十字架上で死んだ時、1人の兵士が彼の脇腹を槍で突き刺します。するとそこから、血と水が流れ出ました。（ヨハネ 19:34）

出産に伴う体液。

赤ちゃんが誕生する時に水と血が流れるように、最後のアダムが深い眠りについた時、死んだ時、と言いましょか、彼から何かが生まれ出て来ます。

イエスの脇腹から生まれ出たものは？ 花嫁。

あなたや私。キリストの花嫁です。

いいですか？ 脇腹から女が誕生しました。

古い格言は真実です。

“神はアダムの頭から骨を取らなかった。女が男を支配しないように。

神はアダムの足から骨を取らなかった。女が男に踏みにじられないように。

神はアダムのお尻から骨を取らなかった。女が男に押さえつけられないように。

そうではなく、あばら骨から。”

それは心臓の近く。

男性の皆さん、そこが女性たちのいるべき場所なのですよ。

結婚は2つの大前提で成り立つことを、聖書はとてもシンプルに語っています。

あなたと私に。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の

妻を愛しなさい。(エペソ 5:25)

つづく

主はこう言われる。

「人間に信頼する者はのろわれよ。

肉なる者を自分の腕とし、心が主から離れている者は。

そのような者は荒地の灌木。

幸せが訪れても出会うことはなく、焼けついた荒野、住む者のいない塩地に住む。

主に信頼する者に祝福があるように。

その人は主を頼みとする。

その人は、水のほとりに植えられた木。

流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、

葉は茂って、日照りの年にも心配なく、実を結ぶことをやめない。」

(エレミヤ書 17: 5 - 8 新改訳 2017)